武蔵村山市立歴史民俗資料館報

資料館だより

第 37 号

平成14年（2002）
7月19日

編集・発行　武蔵村山市立歴史民俗資料館　〒208-0004 武蔵村山市本町5－21－1 TEL 042(560)6620

三　本　榎　　昭和28年6月撮影
八王子市 大塚要七氏 提供

写真展

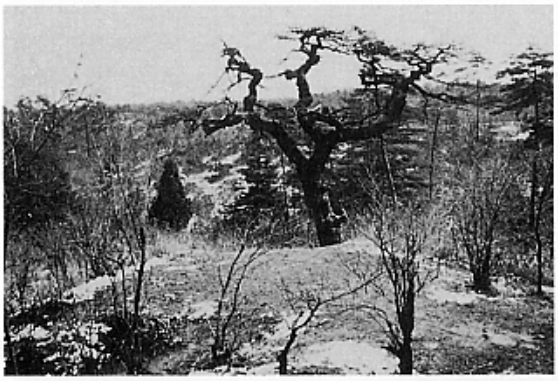
ちっとんべえ昔の武蔵村山
―三本榎と五郎松を中心に―

展示期間　平成14年7月19日(金)～8月31日(土)

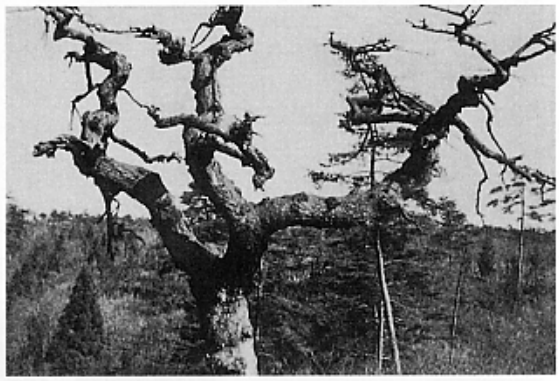
武蔵村山市立歴史民俗資料館では市の歴史を伝える写真の収集に努めてきました。今までに多くの方々から寄せられた貴重な写真の中から今回は市民に親しまれている、あるいは親しまれていた「大木」をテーマに三本榎や五郎松（武蔵村山市との境界に近い所沢市勝楽寺に所在）などの昔の様子を知ることのできる写真を紹介します。このような写真の情報は資料館へご一報ください。

三本榎　(加藤榎と奥住榎)昭和43年初冬撮影
東大和市 星野晴一氏 提供
※奥は御伊勢の森

三本榎　(左:加藤榎、中央:奥住榎、右:乙幡榎)
昭和40年頃撮影　高山定雄氏 提供

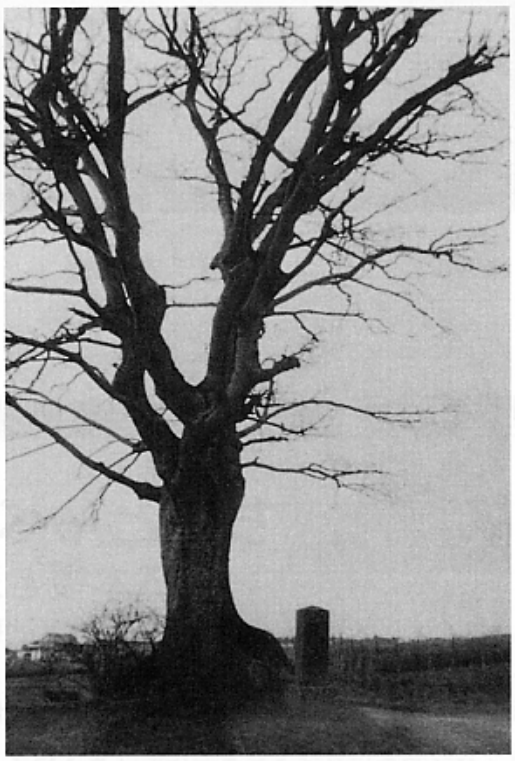


五郎松　(所沢市勝楽寺所在)昭和39年撮影
比留間武吉氏 提供



五郎松　昭和38年頃撮影　荒幡善伸氏 提供

残堀の三本榎　昭和41年11月21日撮影
八王子市 大塚要七氏 提供



残堀の一本榎　昭和38年 3 月14日撮影
八王子市 大塚要七氏 提供

『指田日記』に見る民間療法（その3）

市文化財保護審議会委員　水野紀一

筆者は、『資料館だより』の30号と31号において、『指田日記』に見られる民間療法に焦点をあて、疾病に対する様々な伝統的対処法について、また旧村内外の専門的な漢方医の存在や活動について触れました。今回引き続いて、他村の医師と旧村民との関わり合いをはじめとして、さらに様々な伝統療法の在り方をとらえてゆくことにします。先ずは、すでに取り上げました川崎外料や三ケ島村の外料のような他村の医師と旧村民との関わり合いですが、『日記』によると31号で取り上げた三ケ島外料は眼病医でもあり、万願寺（現・日野市）の女児が眼病で同医師のもとに「引越」し「薬用すれ共、其効ミへず、依之簱を乞ひ祈禱を頼む」（安政三年11/1）とあります。記事中に「引越」とあるのは、今で言う「入院」と思われ、同医師のもとに留まり治療を受けていたものでしょう。しかし薬用したが効果なく、次の対処法として藤詮に祈禱を依頼した、というものです。また嘉永四年十一月の記事にも「伊之助、眼病ニテ石田村眼科家ニ引コシ、今日、三回リニシテ治シカヘル」とあり、石田村（現・日野市）にも眼病医がいたことが知られます。ここでも患者が医師の元に移り、「三回リ」というから三日間滞在して治療を受け、完治して帰村したもののようです。当時、このように医家の所に移り、投宿しながら療養する、という形があったことが知られ、興味深いところです。この他、他村の医師としては、砂川村に活児堂という医師があり、村の小児が急病となり、母親が活児堂に薬を取りに行ったこと（嘉永三年7/7）、また腹部膨満の病を患い重症の婦人に対して臍下より水を数斗抜き取る加療をした（同年12/5）ことが見られます。また内容は簡略ですが、大病の婦人のために正楽寺村（現・所沢市）の医師に往診を依頼した（安政六年4/9）という記事もあります。同村医師については文久三年の記事に「正楽寺村医祐徳来る」とあることから、前述の医師もこの祐徳ではないかと考えられます。これらの事例よりやや遠方の医師との関わり合いを示す記事も若干見られます。一つは布田宿（現・調布市布田）の医師白鳥氏に、病重く往診を依頼した（安政三年5/12）記事です。白鳥医師については、藤詮が先生と称し、師と仰いでいた中藤村の医師斎藤寛卿の子息であり、藤詮とも親交深かった斎藤通亭が、安政六年十月十日に病に伏し、症状重篤のために同医師の往診を頼んだことが記されています。しかし薬用の甲斐なく通亭は十七日に亡くなります。遠方医師のもう一つの事例は、文久二年に記事のある橋戸村（現・練馬区）の医師です。同年七月十二日に「仙次郎小児、療治ノタメ橋戸ニ行」とあり、閏八月一日には、「仙次郎病ニ付橋戸村医来り手足爪際ニ針ヲ立出血シ次第ニ平癒」とあって、同医師が往診に来て、針治療をなしたこと、また同じ日の記事では、仙次郎の妻が砂川村の祭礼に行き、麻疹が出た後、「時疫」つまりコレラに罹ったので同医師が砂川にも赴き、これまた針治療を施した、とあります。ちなみにこの文久二年は、安政五年のコレラ大流行に続いて、江戸期におけるコレラの第三次流行の年です。『日記』は、この両年のコレラ蔓延による中藤村及び周辺地域の悲惨な状況を詳述しています。コレラ流行については、続編で詳しく取り上げる予定です。『日記』に見られる他村医師と村山との関わり合いは以上の如くですが、それらを見るに、病が重篤で、重大な局面に立ち至った時、他村の医師の力に頼ることが多かったようです。これとは逆に、村山の医師の他村への往診も幾例かあります。例えば藤詮が陰陽師ということで深い交流のあった北野（現・所沢市）の天神社宮司栗原氏の子息が病となり、藤詮を通じて医師斎藤通亭の往診を依頼し、実現、疱瘡と診断された記事（安政三年）がそれです。また『日記』の最後の方では、文久の頃より本格的に医師を志し、それが叶い、中藤で開業する藤詮の子息保十郎＝鴻斎が、早くも慶応三年に日野村へ、同四年には長谷部新田に、明治三年には箱根ヶ崎に往診に行っている記事、江戸や八王子に薬品を求めに行っている記事が見られ、二十歳代後半の若き医師鴻斎が活発に活動していた有り様が見てとれます。また陰陽師という立場で疾病と関わり、村の知識人、文化人であった藤詮の元には紙面の都合上詳述はできませんが、様々な地域から多くの医療関係者が来訪しています。具体的な交流内容は『日記』からは読み取れませんが、恐らくそれらの人々との交流において、両者間で医療に関する知識や技術についての情報交換が盛んに行われていたものと思われます。そうしたことで伝統医療の世界も少しずつ進歩・改良されていったことでしょう。それは病に深く関わった藤詮が中藤村にあったからに他ならなかったと思われます。以上のように『日記』からは疾病を通しての村民と周辺諸地域との関係が様々知られ、大変興味深いところです。　（つづく）

寄 贈 資 料（平成13年度）

区分 番号	寄贈者（敬称略）	住　所	寄贈品名	数量
1	日産自動車㈱	榎1－1	村山工場縮尺模型ほか	33点
2	眞福寺 中藤祥瑞	中藤1－37－1	鉄釘（江戸時代）ほか	63点
3	乙幡雄子	本町4－19－2	モンペほか	9点
4	中村輝夫	岸3－15－1	古文書・古典籍ほか	82点
5	佐々木清文	三ツ藤1－57－11	将校行李ほか	6点
6	乙幡和雄	榎2－14－2	床付下駄	1点
7	宮崎豊	岸2－15－5	カゴほか	5点
8	高橋康太	中央4－53	刀ほか	17点

資料館利用状況（平成13年度）

区分 月	開館日数（日）	利用者数（人）	市内		市外	
			人数（人）	割合（%）	人数（人）	割合（%）
4月	23	1,172	552	47.1	620	52.9
5月	23	684	302	44.2	382	55.8
6月	25	633	327	51.7	306	48.3
7月	24	861	363	42.2	498	57.8
8月	26	1,200	432	36.0	768	64.0
9月	17	481	205	42.6	276	57.4
10月	24	1,288	862	66.9	426	33.1
11月	23	965	584	60.5	381	39.5
12月	21	681	507	74.4	174	25.6
1月	22	639	392	61.3	247	38.7
2月	22	909	638	70.2	271	29.8
3月	25	1,506	817	54.2	689	45.8
合計	275	11,019	5,981	54.3	5,038	45.7

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています